

【知事賞】受賞作品と選評

【短歌】

インク跡かすかに残る旧姓の物差し使ひ娘のゆかた裁つ 門脇 順子

四句まで丁寧提示された物差しがリアルな質感をもっており、それが女性として、母親としてたどってきた人生のドラマまで想像させる膨らみを持っています。特に「旧姓」という一語から、尺寸の目盛りの刻まれた竹の物差しの手触りまでが伝わってくるようです。具体的な物の描写が歌の世界の要になるということ、よく体現しているすばらしい歌です。

【俳句】

放たれて青田の空へこふのとおり 若林 恒子

本県の今年度の話題はこうのとりに終始した感じがする。即ちこうのとりは三月に巣作りして産卵。四月に雛が誕生し大喜びしていると、五月害鳥駆除の為の誤射による母鳥の死亡事故が起った。幼鳥は豊岡市の県立こうのとりの郷公園での人工飼育で成長し、再び地元、大東町の生誕地近くの水田に放鳥された。その後、放鳥した一羽が死亡したとの報道もあり、県民は新聞報道に一喜一憂したものである。

掲句は、若鳥が再び生誕地大東町に戻り、地域の人々が見守るなか放鳥された時の喜びを詠ったものである。鳥籠から外に出たこうのとりの若鳥は青田の上をふんわりと優雅に舞い飛び立った。その瞬間の喜びが伝わって来る。

関係者の皆さんのご苦勞に感謝し、今後も続くであろうこうのとりが暮し易い環境を整えられていくことに敬意を表したい。地域に密着した好句である。

【川柳】

四季の色乗せて電車が今日も行く 山本 克治

語りかけが優しく、まるで絵画を見ているかのような作品である。静かに目を閉じていると湖岸を走る電車の音が、心臓の鼓動と重なって聞こえて来る。電車は時刻表通りに四季の色を乗せて、東から西へ、西から東へと今日も走り続ける。句の中には音と色彩と動きがあり、読者を楽しませてくれた。

【詩】

「白い夏」 稲田 忠徳

数分前までは想像もしなかった状況に遭遇し戸惑う青年（大学生）と死を目前にした「痩せた女性」の高揚した発語とのアンバランスが惹きつけます。最終連の現実の無惨さに打ちのめされ、呆然として立ちすくむ青年の姿が浮かび上がるようです。若者らしい感覚が詩的なフレーズに生かされています。

【散文】

「門部王」の歌碑との出会い 田中 香津子

奈良時代の出雲国守の門部王に関心のある作者が、大阪から門部王の歌碑がある揖屋神社＝阿太加夜神社を再訪する紀行文である。普通の紀行文と異なるのは、門部王と大伴一族の関係を分析する部分が大半を占めるからである。「面足山 万葉植物園」と呼ばれる地に歌碑が建っている。「飢宇の海の川原千鳥汝が鳴けば我が佐保川の念ほゆらくに」の和歌の詞書きに「出雲守門部王の京を思へる歌一首」とある。門部王は大原真人ともいわれ、奈良時代に女流歌人として名をはせた大伴坂上郎女の子である。門部王の和歌は郎女が詠んだ「千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波やむ時もなしわが恋ふらくは」に唱和しており、同時代に、坂上郎女が『古事記』の世界を訪ねて、出雲国を訪問した。門部王は大伴家持が因幡の国守に左遷された時に催した別れの宴で「秋風のすえ吹き靡く萩の花ともにかざさずあひか別れむ」と詠んだが、その和歌のあとにくるのが『万葉集』を掉尾を飾る有名な和歌「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」である。作者の想像力の羽ばたきは果てしない。

【ジュニア部門大賞】受賞作品と選評

【短歌】

透明の海より澄んだガラス玉のぞけば違う世界が見えた 井上 琴葉

透明に澄んだ海から見る海底の美しさは格別。その海よりいっそう澄んだガラス玉を覗いた世界がどんな世界なのか、きっと海底にもまして不思議な世界が見えたことでしょう。歌中「海」の語を持ってきたことで、ガラス玉をのぞいた世界の広さも感じられ、作者の驚きも想像できます。この歌には新しい発見の喜びが満ち、若者らしい夢があって共感を誘われ、大賞に選びました。

【俳句】

ソーダ水飲めば自分もはじけだす 津森 あすか

暑い夏の部活動から疲れて帰宅し喉の乾きを癒す為に、冷蔵庫を開けて冷たいソーダ水をグラスに注ぐと泡がピチピチと弾け出す。それを見ているだけでも清涼感一杯で気持がすっきりする。

そのソーダ水を呑み込むと喉越しから気持がよいもので、おなかの中で呑み込んだソーダ水の泡が弾けているようである。それを感じながら、暑い夏を乗り切り気分を切り替えて受験勉強にも励む気分がのって来ている自分を感じているのであろう。「自分もはじけだす」と表現してやる気を表に出している向上心が伺える作品に仕上がった好句である。

【川柳】

ゆきよふれゆきとあそんでみたくなる 田中 道人

作者は小学一年生。無邪気で透きとおるような作品に、審査員一同ところが浄化され、過ぎ去った遠い昔に思いを馳せた。そうだ、今年の冬はこたつに潜り込んでばかりいないで、雪と遊ぼうか。冒頭の「ゆきよふれ」このフレーズに引き込まれる。いい夢を見させてもらった。

【散文】

「柿本人麻呂さんのお話を聞いて」 中島 りな

作者は、郷土益田市が産んだ歌聖「柿本人麻呂」についての講演を聞き、感じたこと、思ったことを素直な感想にまとめている。1300年という時を超えて人麻呂と出会い、人麻呂を想う心に郷土愛を感じさせる文章である。感性の豊かな作者が、今後更に人麻呂について学び、短歌にも興味・関心を持ち、創作してくれることを期待したい。